

実況中継「土曜講座」

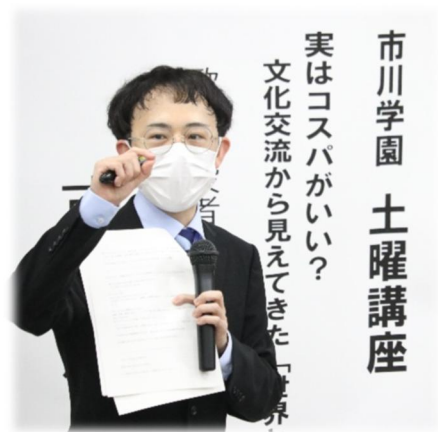
第 4 号 2026年 6月30日発行

市川学園5月30日の土曜講座 於 多目的ホール

市村 竹松先生

実はコスパがいい？世界と向き合うラクな思考法

歌舞伎役者（六代目市村竹松）



市村先生のご紹介

歌舞伎俳優。二代目市村萬次郎の長男。1994 年歌舞伎座「盛綱陣屋」小四郎役に六代目市村竹松を 名乗り初舞台。祖父は十七世市村羽左衛門。早稲田大学国際教養学部卒。父・萬次郎が主催する“みんなの歌舞伎”公演プロジェクトを通じ、国内外に向けた歌舞伎及び日本の伝統文化を発信する事業に携わる。2002 年、日中友好30 周年記念事業として、香港で初の海外公演に出演。その他 2016 年より都内の文化財団 等の要請を受け、訪日客に向けた歌舞伎の紹介事業に携わる。

主な講義内容の紹介

今回の講座は市村竹松先生による「世界と向き合うラクな思考法」についてのご講演でした。市村先生は、歌舞伎役者のご家庭に生まれながらも、インターナショナルスクールを経て早稲田大学国際教養学部に入學したという経歴をお持ちです。その経験をいかして外国人をはじめ多くの方に歌舞伎や日本文化を紹介する事業に携わっていらっしゃいます。文化の違いを感じる具体的な例として、「忠臣蔵」の演目で判官が切腹する時の無念さ、心情などが日本では評価されますが、中国では人の死に際や葬儀を見るのは縁起が悪いとして忌み嫌われているそうです。また、遊女の身売り、遊郭など当時の世相を反映した内容は、日本の歴史や文化を知らないとう理解することが難しいものです。このように、自分の国の文化では当たり前だと思っているものでも、海外の方には伝わらないということが起こりうるのです。国際的なことだけでなく、普段生活している上でも自分は当たり前のことを言っているつもりなのに相手が全く違う解釈をしてしまうということが起こります。そうなった時には「自分の当たり前」で語るのではなく、土台や背景のズレを意識して考えれば、誤解や混乱を回避することができるということです。人間の行動は同じでも「見えている前提」によって結果は変わるものであり、「答え」だけを探すとズレが起きやすくなるため、すこし立ち止まって「今、自分はどんな前提で見ているのか」と考えるようにするだけで、人との向き合い方は変わっていくとのことでした。

受講レポートから

- ・初めて会った人と話すときや何か関わりを持つときに、その相手の当たり前を知らずに行動を注意してはいけないなと思った。例えば、土足で上がるか上がらないかなど。「今、自分はどのような前提で見ているのか」と考え、視点の変換をすることが大切だなと思った。また、一年生の学年目標である「パラダイムシフト」にもつながりそうだなと思った。前提、目的、構造を見ることが成功につながると聞いたので、意識してみたいと思った。
- ・例の中でも生存者バイアスが印象に残り、より多く撃たれていた部分を丈夫にすべきだと思っていましたが、実際はそこは撃たれてもよかった、すなわちそれ以外の部分を強化しなければならないと知って、自分の無意識のバイアスに気づけて興味深かったです。今後違う文化の人と接する時は「自分と相手の前提の違い」を踏まえたうえで話していきたいと思いました。ご講演ありがとうございました。無意識に出ている考え方やバイアス、当たり前について考える良い機会となりました。



(中1女子)



できました。やはり、公式などを暗記するだけではだめで、なぜそうなるかを理解しなければならないということをしっかり再確認しました。そして、生存者バイアスの例がとてつもなくおもしろく感じました。ひっかけ問題のようで、答えが分かった時深く納得しました。今日、帰ってから一回自分の勉強の仕方と他人の勉強の仕方を照らし合わせたり、暗記しているだけのものを調べたり、教科書を読んだりしてしっかり理解しようと思います。

(中3女子)

- ・高校生になってから、もっと頭が良くなりたいだとか、部活で活躍したいという思いが芽生えていて、でも「頭が良い」や「部活で活躍」って具体的になんだろうと考えていました。今回の講演を聞いて自分が今抱えている悩みの本質を突くような内容で非常に興味深いと思いました。特に構造を理解するというのが心に残りました。「何時間勉強」のような表面的な目標を立ててしまっていたので、もっと自分の弱点を克服するような勉強や、将来の進路のために何が必要なのか考えるなどしていきたいと思いました。また、何のために勉強するのかというような勉強の本質についても考え、日々の勉強や学校での授業の意味合いを考えつつ生活していきたいと思いました。
- ・私は普段「文化」の違いを感じることはあまりないけれど、例えば部活とかで各役職によって考え方や思っていることが違ったりすることが多くてモヤッとしたりすることも多かったけれど、お互いに理解してどうすれば一つの作品がより良いものになるかを話し合えばいいことが分かった。また、家族とかと話したりするときに、年代も違うし、父親とかだと性別も違うしって思っている当たり前がズレていてどうして分かってくれないんだろうと思うことも今まで多かったけれど、土台が違っていただけなんだと気が付くことができてモヤモヤが一減った感じがして嬉しかったです。



(高1女子)



・問題を解くとき、解法暗記のように機械的に解いていると、時間を置いて類似するものを解いた時に解けなくなってしまった、というような経験があり、逆にしっかりと背景を理解しようとしたものは解ける、ということもあったので、本質を見失わずに追うことが大切と改めて言語化されて爽快でした。さらに、この感覚が人とのコミュニケーションにも適用できるというのは新たな知見になりました。

コミュニケーション（特に違う文化を持つ人との）も学習の一部と捉えることもできるのか、と何となく感じました。

(高3男子)

(文責：野地 亜由美 先生)